

2017年度 世界展開力強化事業
中南米との大学間交流プログラム（短期留学） 帰国報告書

国際食料情報学部・国際農業開発学科・2年 江村 藍弓

日本から一番遠く離れた国ブラジルへ、8/18 から 9/7 にかけて約 3 週間の短期留学をしてきました。このプログラムでは農大の協定校であるサンパウロ大学(USP)とアマゾン農業大学(UFRA)の二つの大学での交流を含め、農大 OB である日系農家さんのお家でのファームステイなど、農業についてはもちろんのことブラジルの生活を知ることができたりポルトガル語が学べたりと、とても充実したものとなりました。

まず、私の当初の目的とその目的達成のために現地で活動した内容を述べたいと思います。

私が今回ブラジルに行きたいと強く思ったのは開発学科の授業でアグロフォレストリーについて学んだことがきっかけでした。自分でも勉強したりした中で、今までの単作や混作とは異なるアグロフォレストリーという農法に多くの利点があり、またブラジルのトメアスという地域に農大 OB で移住した方がいてその方がこの農法の先駆者なのだということについて知り、現在もトメアスの産業を盛り上げているというアグロフォレストリーを一度この目で見たいというのが目的でした。そして体系的に学ぶことでこの農法の良いところだけではなく問題点も知ることができ、熱帯地域だけではなく将来日本や世界各地に広めることができなかと考えました。そして第二の目的はブラジルに多くいる日系人の方のお話をお聞きし彼らの歴史を知ることでした。彼らやブラジルの学生が日本や日本人に対してどのように思っているのかも気になっていました。

3 週間の中で私たちは、サンパウロ市に 1 泊、サンパウロ大学農学キャンパス ESALQ があるピラシカバという都市に 1 週間、パラ州ベレンに 2 泊ほど、そしてパラ州トメアスに 1 週間滞在しました。広大な土地をもつブラジルなので移動に 1 日費やしてしまったり飛行機の乗り換えで一日かかってしまったりしたので移動も含めての 3 週間でした。

様々なプログラムがあるなかで特に私が一番印象に残っているのは日系農家さんのお家でのファームステイです。今回私がお世話になったのは坂口わたるさんのお家でした。坂口さんはアグロフォレストリーというシステムをつくりあげた坂口のぼるさんの次男で、現在は 350 ヘクタールという土地を所有し 80 種もの作物を栽培しています。はじめアグロフォレストリーをみた時、その「森らしさ」にあ然とせざるを得ませんでした。まるでジャングルのようにほぼ原生林の姿でした。実際に土地の半分は原生林のまま残してあって、まだ足を踏み入れたことのない場所もあるそうです。このファームステイではとても多くのことを学ばせていただきました。坂口のぼるさんがどのようにアグロフォレストリーを築き上げたか、トメアスの歴史、そしてブラジルでの実際の暮らしを知ることによって感じるものが多々ありました。

坂口さんは、お父さんであるのぼるさんが先住民の暮らしをみて現在のアグロフォレストリーと呼ばれるような農法を思いついたと教えてくれました。移民が当初ブラジルに入ったのは南米拓殖株式会社がカカオの栽培をさせる事業のためでありましたが、途中からはコショウの栽培が盛んになりました。しかしコショウの病害が広がってしまったため移民は別の地域に移動するか、もしくは隔離された土地へ移るしかほかはなく、また苗にまでも病害がついてしまいコショウの栽培は厳しいものとなっていきました。そこでのぼるさんはアマゾン流域に住んでいる先住民が、自分たちの食べた後の植物の種を植え、そこから芽を出した植物が家の周りに生えているという豊かな生活を送っていることに気づき、彼らの生活を真似たのです。坂口のぼるさんはよく「自然を見て、自然から学べ」と言っていたそうです。

トメアスで一番、アグロフォレストリーで有名な坂口さんのお宅での日々はとても貴重で多くを吸収しようとたくさん質問をしました。大学ではアグロフォレストリーの利点しか教わらなかったためデメリットはあるのかと聞いてみましたが、彼らはそれしかやったことがないため考えたことがないと言っていました。しかし、入植当時のコショウの病害の拡がり方をみると単作では栽培のリスクが高いため、持続可能ではないと考えていました。私もそう思います。単作は生産性と確実性はないですが、さまざまな種類の作物を植えていると病気の拡がりを防ぐとともに、毎年何かしらは収穫できる点が有利です。また、坂口さんの農場は 350ha と規模がとても大きいので従業員を雇っていますが、彼らがどこにどの植物があるか場所が分かるようになるまでに時間がかかってしまうのが難点だと言っていました。一度農場の地図を作ってみたようですが、従業員は基本学力が低いので文字が読めず意味がなかったそうです。最後に、坂口さんは「アグロフォレストリーは温帯地域でも実現できる」とおっしゃっていました。大木になる植物があると森が成長しやすいため、果樹が大木になりやすい熱帯地域では栽培しやすいが、温帯植物にも大木になる木はあると言っていて、私が一番気になっていた問題が少し解決されたような気がしました。

私たちが滞在した時期、農場の植物たちはまだ花を咲かせておらず、農作業はあまり多くありませんでした。主に企業に売るためのカカオを乾燥させ皮をむく作業や、アサイーを食べられるように加工する作業だったため、トメアスの街中へ、かつて移民が船で到着したという港に連れて行ってもらったりしました。そこには広い川が広がり、かつての木でできた船着き場はほぼ無くなっていて、前の政府が計画していた途中だという建物があり、ここに日本人が来たのは何十年も前なのだということ、また時代の流れを感じました。夕暮れ時だったためかその日は地元の若者も遊びに来ていました。当時はサンパウロ州サントスからベレンまで大きな船に 123 ほどの家族を乗せて、ベレンからトメアスまでは小さな船で移動しました。移民たちが当時移住を決めた時は「大きな土地がもらえる」などの良い点ばかり聞かされ、実際来てみると見ていたイメージ写真や聞いていた話と全く異なり、遠くまで広がるびっしりとした熱帯森林地帯に驚いたと言います。これは私のブラジル短期留学が決まった後に知ったことなのですが、私の遠い親戚がサンパウロに現在住んでいるそうです。彼らもきっと同じような気持ち、状況でブラジルに来たのでしょう。地球の裏側に移住を決めるのは相当の度胸と勇気が必要です。私は自分の親戚と現地でお世話になった日系

農家さんを照らし合わせて話を聞くことで、少しでも多く彼らの努力と苦勞が今の成功につながっていることを理解できたと思います。現在は移住をした人のうち3割しかブラジルに残っていないらしく、その他の人々は日本などの海外に出稼ぎに行き家族と暮らしているそうです。いまブラジルで生計をたてられている人々は成功を収めた人々だと思うのでとても尊敬します。ファームステイでお世話になった坂口さんはもちろんですが、同じくベレンに住む農家の鈴木さん、大西さん、乙幡さんには優しくして下さり、トメアスの問題点やブラジル政府の問題点についてお話して下さったこと深く感謝します。

プログラムの一つである大学間交流で私たちが訪問したのはサンパウロ市ピラシカバにあるサンパウロ大学(USP)の農学キャンパス ESALQ とアマゾニア農業大学(UFRA)です。どちらの大学もブラジル国内に複数のキャンパスを持ち、サンパウロ大学は総合大学、アマゾニア農業大学は農業専門大学となっています。USP の農学キャンパス ESALQ はとても広大で車を利用して移動するのが主流であり、施設が充実していてさまざまな研究テーマが存在しています。学生は自らのコースに合った研究室に所属しそれぞれ研究に励んでいました。ここでは学生たちが地域や企業と取り組んでいるプロジェクトを紹介していただいたり、研究室や栽培施設を見て回りながら説明をしていただいたりしました。この大学の学生は皆積極的で、明るくはきはきとしていました。ブラジル国内では1%しかいない日系人もこの大学では10%いるため、日本語を話せる学生が私たちとの交流を進んで行ってくれました。彼らはみなフレンドリーで日本の文化に興味があるようでした。学生交流のなかで私たち農大生は日本の文化を紹介するワークショップを開催しました。当初考えていた状況とは異なり始めは困惑しましたが、折り紙や浴衣の着付け、そして私が披露した空手のすべてを ESALQ の学生は関心を持って参加してくれたので用意してよかったです。キャンパス内には牛舎や研究用のとても大きい畑、魚の養殖施設などがあり、勉強するには絶好の環境だと思いました。プログラムの中では学生による学部の説明や研究内容の紹介があり、ブラジル農業の問題点なども知ることができました。そして実際に、研究用の畑に行き農業機械に関する問題点を見ることができました。ポルトガル語の拙い私たちに通訳をしていただくなどとてもよくしてくれた Prof.Shirota をはじめ、夕食をご一緒していただいた Prof.Helaine には私たちの交流に快く協力していただいたこととても感謝しています。

もう一つの大学 UFRA では少ない日数ではありましたが、ベレンに住む農大 OB である日系農家さんに案内をしていただきながら、学生との交流が行われました。ポルトガル語の授業を学生が開いてくれたのですが、彼らは英語があまり話せずポルトガル語をポルトガル語で教わるような状況でした。その時に思ったのは、英語は世界共通言語といえども相手が話せて初めてそれは通用するのだなと痛感しました。やはり現地の言葉を学ぶということはそこに住む人々と交流をする上で大切なことだと改めて思います。

ブラジルといえば熱帯果樹が有名です。現地には日本にはないフルーツが多くあり人々は日々フルーツジュースなどでフルーツを食べていました。レストランでは必ず *suco de maracujá*(パッションフルーツのジュース)などさまざまなフルーツのジュースがあります。それらは必ず大量の砂糖が入っているため甘いですが、暑い時期にはとても美味しく感じ

ました。中でも私が気に入ったフルーツがアサイーです。アサイーは南部と北部の地域ごとに食べ方が異なり、南のサンパウロではシャーベット状やジュースにするなど甘くして食べますが、北のパラー州などでは主食として食べるためアサイーを専用の機械で絞って固体に近い液体にした後、そこに砂糖とキャッサバの粉を好みで入れて固めて食べます。坂口さんのお家で作ったアサイーはとてもフレッシュで、癖になる味でした。日本で手に入るアサイー系のデザートとは全く異なるため、ブラジルでしか食べられません。私もあの味が恋しいです。可食部が一割で九割は肥料などに活用するという点もアサイーならではの特徴です。

今回の留学を通して、ファームステイでは私が一番の目的としていたアグロフォレストリーの現状をみるということ、そしてブラジル全体の農業の問題点、そして3つの地域の風土の違いを知ることができました。またトメアスだけではなく ESALQ のあるピラシカバでも日系人団体の集まりに参加させていただける機会があり、今回の3週間で多くの日系の方にいろいろなお話や意見を聞くことができました。当初の目的は達成できたのではないかと思います。

次に、今後の取り組みについてですが、ピラシカバに滞在していたときに ESALQ に現在一年間の長期留学をしている内海さんと竹中さんと行動を共にし、慣れないブラジルでの生活をサポートしていただきました。お二人のお話や大学での生活をみていて、短期だけでは築くことのできない関係や経験できないことがあると感じ、前から考えてはいたのですが、長期留学をするという選択肢が私の中で濃くなっていきました。彼らも去年の短期留学に参加して長期留学を決めたと言っていたので、さらに語学力や農業に関する知識を増やし、私も長期留学をしたときにたくさんのことを吸収できるようなスキルや知識を増やしていきたいと思いました。また、海外に行くと外国人から必ず日本のことを聞かれます。中には私たち日本人よりも日本文化について詳しく知っている人もいて、その時に答えられないようでは恥ずかしいので、もっと日本の文化や農業、政治について知っておくべきだなと感じました。

プログラムに対する要望ですが、今回の3週間という期間は一昨年よりは延びたと聞きましたが、それでも移動に時間がかかってしまい1か所の滞在期間がどうしても短くなってしまいます。もう少し期間を延ばしていただけたら、余裕ができ一つ一つ丁寧に活動していけるのではないかと思います。特に、ファームステイが4日間ほどしかなく、ブラジルの農業を知ることとはとても貴重ですので、この期間が延びると来年の学生はさらによい経験ができるのではないのでしょうか。

最後に、今回の短期留学で引率してくださった齋藤先生、プログラムを組んでいただいた世界展開力強化事業担当者様、ESALQ と UFRA の先生方のおかげで充実した経験をすることができました。無事に帰ってこられたこと、感謝しています。本当にありがとうございました。



↑坂口さんのアグロフォレストリー



↑坂口さんが農協に出している商品たち



↑かつて移民が船で到着したところ



↑カカオの皮むきをしているところ



↑木から採ったアサイー